

# 選択漁具・漁法新技術開発調査

(抄録)

原 子 保 ・ 蛭 名 政 仁 ・ 山 田 嘉 暢

## 1. 漁獲実態調査

大戸瀬地先の操業網を任意に5ヵ統選定し、それぞれの網ごとに魚種・漁獲量・漁獲金額等を調査した。

## 2. 漁獲影響調査

底建網の後半部の目合を66mmにした試験網と目合が50mmの操業網を同じ海域に設置し、タイ類の魚体や漁獲量について、統計的に比較検討した。

## 3. 経済効果調査

試験網と操業網の漁獲量及び金額について、統計的検定を行い、経済効果を判定した。

## 4. 在来底建網の漁法の実態調査

岩崎村から十三漁協までの底建網を操業している漁業者から、底建網の規模、現状及び問題点について聞き取り調査を行った。

## 5. 結 果

網の目合を大きくすることによって、0+才マダイ幼魚を漁獲しないことを確認したが、カワハギが目掛するなどの新たな問題が生じ、操業に使用されている50mmの目合が、非常に合理的かつ実用的であることが明らかとなった。

逆に66mmの目合では、漁獲量、漁獲金額ともに減少し、経営上の支障が生じる結果となった。

日本海沿岸域におけるタイ類の漁獲量は、ここ30数年間43～700 t（県統計）と大きく変動しているが、減少傾向は認められない。

また、11月から1月にかけて、毎年50～70 tの200 g以下の幼魚が漁獲されているにもかかわらず、翌春漁獲されるタイ類の80%以上は1+才幼魚であり、この傾向にも変化は認められなかった。

これらのことから、少なくとも11月から12月にかけて底建網で漁獲される0+才幼魚は、タイ類全体の漁獲強度に、余り影響を与えていないものと考えられた。

大戸瀬地先においてタイ類幼魚が漁獲される海域は限定されており、網口を東から南東方向へ向けなければ、漁獲できない。

このようなことから、タイ類幼魚が漁獲される海域に設置した底建網の何ヵ統かを12月中旬頃まで、その網口を北から北西方向に向けて設置することによって、現在使用している網に手を加える事なく、ある程度タイ類幼魚を漁獲しないことは可能である。